

九州天皇家論 章 大八州

九州天(あま)王朝誕生 筑紫嶋とその国々



「筑紫嶋」は九州に比定されている。九州は確かに島である。だが、それは近代人の地理認識で、超古代人の地理認識ではない。九州全体とするには無理がある。ゆえにもう少し地域を限定して、福岡県が後世「筑紫」と呼ばれたことから、福岡県が「筑紫嶋」と比定されることもある。だが、福岡県が島だったとは云えない。今も昔も九州の一部に過ぎない。伊邪那岐命が國を造った「島(或いは州)」とは通常の意味で「嶋」、或いは「中洲」である。九州は通常感覚では「島」とは言えない。「大八州」という漢字が示す如く、「國生み」は「島」または「州」での建国である。「筑紫嶋」も通常感覚で「島」であると考えなければならない。ではどの島か。この嶋の特定は難しく、判断材料は少ないが、追えないことはない。

- (1) 身一つで面四つ有り。面毎に名有り。
- (2) 故、筑紫國は白日別と謂ひ、豊國は豊日別と謂ひ、肥國は建日向日豊久士比泥別と謂ひ、熊曾國は建日別と謂ふ。
(古事記上巻大八島國の生成)

ヒントはこれだけである。「淡路島」「伊豫二名島」「隠伎三子嶋」を特定した筋を追っていこう。

- (1) まず島であること。そして、やはり、現在では陸続きになって「半島」となっている可能性が高い。
- (2) 伊邪那岐命は関門海峡を西から東に進んで「淡路嶋」「伊豫二名嶋」「隠伎三子嶋」に建国した。建国の進路は西から東である。
- (3) 豊國は豊日別とも云った。筑紫嶋の豊國は東の分国だった。本国の豊國は彦島に存在した。分国豊國は彦島の東方に存在した筑紫嶋の中の一つの弥生集落だった。
- (4) 面四つあるという形状はこの島も四角形だったと考えられる。島の四方にそれぞれ弥生集落が存在した。

神武東征の「筑紫・菟狹」

神武東征にも「筑紫」が登場する。神武の東征行路を特定するには「筑紫」を特定しなければならない。そのためにも國生み「筑紫嶋」を特定しなければならない。全ては相関関係の中にある。双方矛盾なく全体像を描くことができなければならない。「大八島創成」「天孫降臨」「神武東征」は全てが同じ古代世界の中の出来事である。全てが伊邪那岐命が建国した天(あま)王朝内の出来事である。神武は東征の際、「筑紫の菟狹」で饗応されている。

行きて筑紫國の菟狹に至ります。菟狹は地の名なり。此をば宇佐と云ふ。時に菟狹國造の祖有り。号して菟狹津彦・菟狹津媛と曰ふ。乃ち菟狹の川上にして、一柱膳宮を造りて饗奉る。

(日本書紀神武天皇)

古事記もほぼ同じである。

即ち日向より發たして筑紫に幸行でましき。故、豊國の宇沙に到りましし時、其の土人、名は宇沙都比古、宇沙都比賣の二人、足一膳宮を作りて大御饗献りき。

日本書紀・神武……………筑紫國の菟狹に至ります。

古事記・神武……………筑紫に幸行でましき。故、豊國の宇沙に到りましし時

日本書紀と古事記のこの二つの記述は一見別々のように見えるが矛盾はない。もう少しわかりやすい言い方に変えて見よう。

日本書紀・神武……………筑紫嶋の「筑紫國の菟狹」に到着した。

古事記・神武……………筑紫嶋の「豊國の宇沙」に到着した。

神武が向かった「筑紫嶋」には「筑紫國」と「豊國」があった。「國産み」の「筑紫嶋」の記述と全く同じである。伊邪那岐命の「國産み」と神武「東征」は同じ世界の出来事である。神武の時代には「筑紫嶋」は陸続きになっていて、もはや嶋とは言えなかったであろう。故に古事記は「筑紫」とだけ書いた。古事記の「筑紫」とは「筑紫嶋」の意味である。神武は伊邪那岐命が建国した「筑紫嶋」の「筑紫國の菟狹」に到着したというのが日本書紀である。古事記の伝承では神武は「筑紫嶋」の「豊國の宇沙」に到着した。「筑紫國」も「豊國」も小さな「筑紫嶋」の中に存在した小さな弥生集落である。國と云っても国境があるわけではないし、領土が線引きされていたのではない。日本書紀は「筑紫國・菟狹」で、古事記は「豊國・宇沙」である。二つの「ウサ」は所属する國が異なるが、「ウサ」は恐らく「筑紫國」と「豊國」の境に存在した港町だったのであろう。故に「筑紫國の菟狹」と云い、また「豊國の宇沙」とも伝わったのであろう。神武を歓待したのはその港を支配する菟狹津彦・菟狹津媛(宇沙都比古・宇沙都比賣)であった。「菟狹津彦」とは「菟狹」という名の港を支配する「彦(王)」という意味である。

筑紫嶋は門司区・古城山である

では、國生みの「筑紫嶋」とは一体どこなのか。特定していこう。

- (1) 彦島の東方に位置する。
- (2) 島の形状は四角形である。神武の時代には島は陸続きになっていた。現代では半島(岬)である。
- (3) 古来より良港が存在した。

航空写真でそのような島、島影を探してみよう。島と見えるのはどこか。「筑紫嶋」とは門司区古城山である。現在は地続きで半島であるが、古代は「嶋」だったとみることができる。



筑紫嶋の弥生国家「赤の名」の解説

伊邪那岐命、伊邪那美命が國生みした古代「筑紫嶋」とは旧門司の古城山である。この地が古来交通の要所であったことはいうまでもない。関門海峡を渡るにはここから対岸に向かうのが最短である。古くからの港町である旧門司に伊邪那岐命、伊邪那美命は建国した。

「筑紫嶋」に存在した四つの國には別名があった。その解説に挑戦してみよう。四つの國に共通する語は「日」と「別」である。「別」は分国の意である。本国は別に存在した。「日」は「日向」と対である。「日向」とは「日が向かう」という意味で「西」を表す。そして「日」は太陽が昇る「東」を表す。「日」と「日向」は東西を表す古代の方角の専門用語である。

筑紫國……白日別

豊國……豊日別

肥國……建日向日豊久土比泥別(久より泥までは音を以るよ)

熊曾國……建日別(曾の字は音を以るよ)

(古事記神代記)

筑紫國(白日別)

「筑紫國」とは「筑紫嶋」の「筑紫國」である。「筑紫嶋」は門司区古城山である。「筑紫嶋」とはその名の示すように、形状が「土筆(つくし)」に似ていたのではないだろうか。春に芽を出し、ニョキニョキと伸びるスギナの子が当時「土筆(つくし)」と呼ばれていたかどうか、無論不明である。だが、仮に「土筆」という小さな草が当時も「土筆」と呼ばれていたとすれば、「古城山」は誠に「土筆」に似ている。「古城山」が「筑紫嶋」と呼ばれたのも当然であろう。

「筑紫國」の別名は「白日別」である。「白」が国名である。読みは「シラ」であろう。「シラ」とは「新羅(シンラ)」である。「白・日・別」は「新羅の東の分国」という意味となる。旧門司には古代新羅の王家一族の分国が存在したことになる。

豊國(豊日別)

「豊國」の別名は「豊日別」である。「豊・日・別」とは「豊國の東の分国」という意味となる。この国名には他と國名と違った特徴がある。本家の国の名前も「豊」で、分国の名前も「豊」だというのである。つまり、二つの「豊國」があったというわけである。一つが旧門司に存在した分国の「豊國」で、もう一つが彦島に存在した本国の「豊國」である。この二つの「豊國」は東西の位置にあった。「日向の豊國」と「日の豊國」と云える。

「豊國」とは何か。「豊かな國」という意味ではない。少し戻って「伊豫二名嶋」とは「伊豫」と呼ばれた女王が統治する嶋だった。この女王は、また「豊」とも呼ばれていた。故にこの女王が統治する嶋は「伊豫」また「豊」と云う二つの名前と呼ばれた嶋、つまり、「二名嶋」と呼ばれたのである。「伊豫」という名前はこの嶋の名前以外には現れないが、もう一つの名前「豊」は他の国名に現れる。それが「筑紫嶋」の「豊國」である。「豊國」という國名の意味は、「支配者豊の國」という意味である。「筑紫嶋」の「豊國」は「伊豫二名嶋」に君臨した女王「豊」の分國だったのである。

神武が饗応を受けた「豊國宇沙」は彦島の本国の「豊國の宇沙」ではなく、旧門司に存在した分国の「豊國の宇沙」であった。神武の時代にもこの弥生国家は存続しており、神武は東征の第一歩としてこの國を訪れた。その目的は侵略ではない。東征と云うべきではなく東行と云うべきであろう。ここは神武の祖先、伊邪那岐命・伊邪那美命が切り開いた天(あま)王朝の圏内である。従って、ここでの戦闘はなく、かえって神武は「豊國」の湊の長官に歓待されている。その後、神武は「筑紫嶋」に造られたもう一つの國、「筑紫國」に移り、その地の岡田宮に一年滞在した。

熊曾國(建日別)

「熊曾國」は「建日別」という。注に「曾の字は音を以るよ」とあるので、私たちに馴染みのある漢字表記にすると、「熊曾國」とは「熊襲國」である。「熊襲國」は「建日別」と別名が書かれている。その意味は「建の東の分国」である。「建」とは熊襲の王の名前である。従って、「筑紫嶋」の「熊襲國」は「熊襲の東の分国」だと表明しているわけである。

古代九州には「熊襲王朝」と云うべき強力な古代国家が存在した。その分国は九州各地に存在しており、旧門司にもその分国が存在したのである。彦島に存在した古代「土佐國」も元々は「熊襲」の分国であった。神武東征において最大の戦闘相手はこの「熊襲」の二人の王であった。

肥國(建日向日豊久士比泥別)

「肥国」は別名が「建日向日豊久士比泥別」である。この難解な表記の解読に挑戦しよう。

- (1) 「建」とは「熊襲国」である。「肥國」の別名は「建日向」となっている。「日向」は西。故に「建日向」は「熊襲國の西」と読む。別名は「熊襲日向」と「日豊久士比泥別」に分かれる。
- (2) 「日豊久士比泥」は「久より泥までは音を以るよ」と注釈があるので、「日豊」と「久士比泥」に分けて読む。「日豊」は「東の豊國」と読む。
- (3) 「久士比泥」は「久より泥までは音を以るよ」と注釈しているように当て字である。「泥(ね)」とは「どろ」の意味ではなく、本来は「嶺」で「山」の意であろう。例えば「島根」は「島の嶺」という意味である。従って、「久士比泥」は「久士比の嶺」という意味となる。「久士」は、私たちがよく知る地名漢字を使えば「久慈」であろう。肥の別名は「熊襲國の西・東の豊國・久慈の嶺」と読む。「筑紫嶋」に造られた古代「肥國」は高地性弥生集落であったことを示している。

これらの別名の解読に従って、古代「筑紫嶋(古城山)」に伊邪那岐命・伊邪那美命によって建国された四つの弥生国家の位置を特定してみよう。「肥国」は別名から考えると、「淡道之穂之狭別嶋」と同じような高地弥生集落だったと思われる。「和布刈公園」となっている山、門司城があった古城山に存在した弥生集落が「肥國」である。



伊邪那岐命の御祓の地 「竺紫日向之橘小門之阿波岐原」の解説

伊邪那岐命が「黄泉の国」から帰って禊ぎをする場所は「竺紫日向之橘小門之阿波岐原」である。この場所はどこか。伊邪那岐命はここでの御祓によって多くの子どもをつくったと伝わる。「天照大神」もこの時産まれた。御祓の場所を特定すれば、「天照大神」生誕の地を私たちは知ることができる。

場所の名前は「竺紫・日向・橘・小門・阿波岐原」と分析できる。古事記は「竺紫の日向の橘の小門の阿波岐原」と訓んでいる。それぞれの語句が示す意味を解析していこう。

「竺紫」は旧門司

「國生み」神話に於ける「州」(クニ)は全て島をさす。「竺紫」とは旧門司である。伊邪那岐命の禊ぎの場所を示す住所は、まずこの「旧門司」を起点として表示されている。

「日向」は西

「日向」とは文字通り「日が向かう」という意味である。「日に向かう」ではない。「日にむかう」では方向は定まらないが、「日が向かう方向」は絶対で、「西」である。「筑紫・日向」とは「筑紫の西」という意味である。「日向」は現在では地名となっているが、原義は西という方角を表す用語である。「筑紫・日向」が「大地名＋小地名」という地名として定着したのは後代のことで、元々は「筑紫の西」という意味であった。各地に「日向」の地名が存在するのは、ある場所を起点としてその西という意味で使われていた方角用語が地名に変化したのである。現代においても、「京都西」「姫路西」というのと同じである。

「橘」は立ち鼻

「橘」とは何か。「橘の木」と考えることもできるが、この「橘」は木ではなく、「立ち鼻」つまり、「人の鼻」を表す言葉である。人の鼻の形をした地形を「立ち鼻(橘)」と表わした。「竺紫・日向・橘」は「旧門司の西の立ち鼻」と読む。「旧門司」の「西」に「人の鼻」の形をした場所がある。古代人は高い山から見てそのような名前を付けたのであろう。従って現在では、航空写真で探すことが出来るはずである。「人の鼻」の形をしているのは彦島・老町である。誠にその地形は「鼻」・「口」・「顎」と云える。「鼻」は立体的に見える。よって「立ち鼻」である。「橘」は美称である。

「小門」は彦島・小戸

「橘・小門」は「橘の小門」である。「橘」は彦島・老町である。「小門」は「をど」と読み、彦島小戸である。彦島と下関市との間の狭い海峡を云う。

「阿波岐原」は「栗國」

「黄泉」から逃げ帰った伊邪那岐命が「ミソギ」をした場所は彦島・小戸である。ここまで特定できれば「阿波岐原」についてもさらに深めることができる。「阿波岐」の「阿波」とは「栗」である。その意味は本来は「泡」であろう。彦島小戸で砕け散る「泡」である。「阿波」とは「伊予二名嶋」に國生みされた古代國の「栗國」である。伊邪那岐命は彦島小戸で12人の子どもを得た。

然して後に、左の眼を洗ひたまふ。因りて生める神を名づけて天照大神と曰す。

(日本書紀神代上第5段)

ここで有名な天照大神が生まれる。説話にはその母の名前は書かないが、私たちはその母を想定することが出来る。禊ぎの場所は彦島に存在した弥生国家「栗國」だった。「栗國」は女王が支配した國である。「栗國」の王は「大宜都比売」という女王であった。伊邪那岐命は黄泉から「栗國」に戻って、この国の女王との間に12人の子どもをつくったのであろう。

天照大神は彦島小戸で生まれた

伊邪那岐命の故地の特定は私が最初ではない。既に西井健一郎氏(古田史学の会員)が特定されている。氏の研究論文を「古田史学会報No97(2010・4・5日付)」から一部抜粋して紹介しよう。

祖神イザナギは彦島の小瀬戸にいた

まず、記紀はイザナギ氏族の史書である。なぜなら、記紀の登場人物のルーツはイザナギ命に収斂する。

天照大神でもイザナギから生まれたように描かれる。ごく一部を除き、イザナギの先祖か後継者、その彼等に正反の係わり合いを持った人物しか登場しない。つまり、イザナギをルーツとする、というよりは彼の覇権を引き継ぐ人達の系譜と経歴が記紀の根幹をなす。それはイザナギの居た地を出自とする氏族に伝わっていた伝承が記紀のストーリーの根幹を形成している、と言い換えることができる。

では、イザナギ尊はどこにいたか。

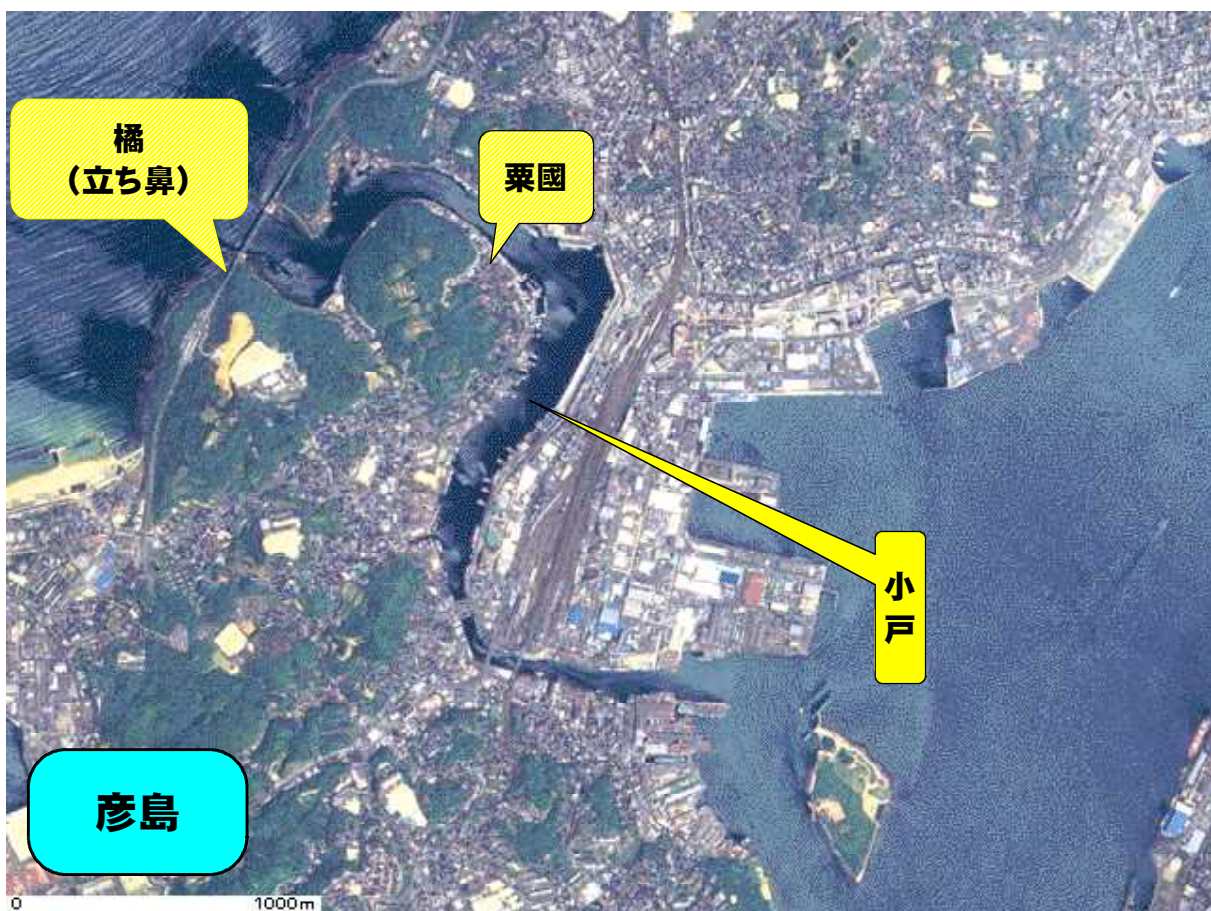
答は「橘の小戸」、黄泉から逃げ帰ったイザナギ命がミソギをしたと記す地である。

私はその「小戸」を下関市街地と彦島とを隔てている狭い海峡、今でも土地の人が「オド」と呼ぶ小瀬戸のこととする。だから、記紀のもと(つまり種本)になった原伝承はこの小戸近辺にいた氏族のものであったとの前提で記紀の記事を解する。記紀はそれらの事績をあたかも全国各地のもののように描くが、源は穴戸彦島の伝承と受けとめる。だから、小戸の頭につく「竺志日向」も伝承が生まれた太古の彦島では、小戸の橘の周りの地域が「タケ志」の「ヒ(イ)・ムコ」と呼ばれていたとみる。

竺志は九州、日向は宮崎県と受け取るのは、それが記紀編者の狙いではあるが、八世紀以降の知見に基づく解し方である。

「葦牙彦舅は彦島(下関市)の初現神」(古田史学会報No97) 西井健一郎

「竺紫日向之橘小門之阿波岐原」が下関小戸という西井氏の特定の意味は限りなく大きい。このような特定をなし得た研究は他にない。「およそこの当たり」というのは見かけるが、ピンポイント特定はない。しかし、記・紀解読にはピンポイント特定が必要である。しかも、伊邪那岐命の故地の特定は記・紀世界総体の座標原点を特定したことと同様の意味を持つ。



神武の徴兵は小戸

「磐余彦」の「イワレ」とは「小戸」の地名

磐余彦のイワレとは小戸の地名である。紀・神武は「それ磐余の地、旧名は片居、または 片立という。わが皇師が虜[テキ]を破るにいたり、大軍集まり、その地に満[イワ]めり。よって号を改め、磐余となす」と記す。これも穴戸伝承から。片立の「片(カタ)」は後世日本生まれの訓、だから原伝承での「片立」は「へ(シ)タチ」への当て字だった可能性があり、そこから初代神「常立(トコタチではなくヒタチ)神」が生まれたとも考えうる。常陸国を「ヒタチ」国となぜ訓むのかと同様に。一方、ヒタチは「ヒタタシ」の訛かも。

(穴戸伝承「磐余彦、東征す」 西井健一郎)

神武が東征に当たって徴兵した場所は「小戸」、彦島小戸である。古事記では神武は「吉備」で徴兵したと記している。神武が8年居た宮は「吉備高島宮」という名前であるから、神武は「吉備」に居たのである。古事記の神武が徴兵したのは「吉備」である。この吉備は國生みの「吉備児島」の吉備である。「吉備」に付属していた小島だったから、「吉備児島」と呼ばれたのである。「吉備」と「小戸」は異なる場所と思われるが、実はどちらも彦島に存在した。神武東征の出発地であった「吉備」とは岡山県吉備ではなく、彦島に存在した古代「吉備」である。神武はここで大軍を招集し、この地に満ちた(イワメリ)。よって、「磐余(いわれ)彦」と呼ばれたのである。神武の軍はこの地、彦島の出身者であった。「磐余(いわれ)」とは「岩割れ」とも解釈できる。「岩割れ」とは彦島の異称である。神武は確かにここにいたのである。

「曲浦」とは彦島小戸、「速吸門」も彦島小戸

黄泉から逃げ帰ったイザナギはこの小戸、「竺紫日向之橘阿岐原」で禊[ミソギ]し、綿津見神や筒之男三神などを成す。海神綿津見神は「阿田津のミ」、つまり東征に出発する神武を出迎える珍彦が釣りをしていた曲浦(アタのウラ)の首長の職位を神格化したものだ。アタとは「親指と中指とを開いた広さ」とあるが、原初はその親指と中指が描く形(L字型)を指していた、と見る。(穴戸伝承「磐余彦、東征す」 西井健一郎)

神武は彦島小戸で徴兵した。東征の時には「曲浦」の「珍彦」を召し抱えた。「速吸門」も神武東征に現れる地名である。「曲浦」「速吸門」も同じく彦島小戸をさす。東征解説にとって必須の「曲浦」「速吸門」のピンポイント特定によって神武東征の足取りを正確に掴むことができる。



彦島小戸